

メタ認知を活用し、論理的に書く力を育成する授業
—構造読解の応用と相互評価を通して—

福島県立福島東高等学校 教諭 富良謝 和信

1 研究の趣旨

「論理的に書くこと」は、その必要性や有用性が認められているものの、高校生にとって苦手意識の強い分野である。高等学校でも「書くこと」について様々な取組は行われている。しかし、「論理的に書く力」を育成するという観点では指導が十分な成果を上げられていない。その原因を国語科の視点から考えると、読解指導の過程で学んだ論理構造を「書くこと」まで結びつける取組が少ないことや、「書くこと」の指導には時間が掛かるために一斉授業では行わず、「書くこと」の指導は進路等で必要とされる一部の生徒に対して行う個別添削に頼りがちであることなどが考えられる。

これらの現状を踏まえ、以下の仮説に基づき、「論理的に書く力を育成する授業」について研究を進めた。

高等学校国語科における「書くこと」の指導において、以下の手だてを講じてメタ認知を促せば、生徒は「論理的に書く力」を育てることができるであろう。

- | | | |
|--------|------------------|-----------------------|
| 【手だて1】 | 構造読解の応用 | (メタ認知的知識—方略についての知識) |
| 【手だて2】 | 相互評価による読み手意識の獲得 | (メタ認知的知識—方略についての知識) |
| 【手だて3】 | 手だて1、2を用いながらリライト | (メタ認知的活動—メタ認知的モニタリング) |

2 研究の概要

(1) 授業実践に際して

研究協力校第1学年(平成27年度5学級201名)を対象に、仮説を検証するための授業実践を行った。授業構想では、一斉授業で展開でき生徒全員に効果があること、読解の授業と関連させること、生徒たちが「論理的に書く」ことへの達成感を得られて苦手意識の改善につながることを、これらの3点を重視した。

(2) 授業実践「二項対立で論理的文章を書く」授業(『水の東西』山崎正和)

授業前段階の文章として「高校生の自由と責任について」(400字)を書かせた。『水の東西』を二項対立構造に着目して読解した後、二項対立構造を応用した構造メモを使いながら「〇〇の東西」(400字)を書かせ、それに対して「二項対立構造が成立しているか」、「対立構造から主張への展開がなされているか」の2点を評価の観点として、相互評価と自己評価をさせた。

授業の最終段階では、二項対立構造の応用、自己の文章に対する読み手意識など獲得した知識を用いながら、「高校生の自由と責任について」(400字)をリライトさせた。

リライト後の文章を、「論理構造が明確で、主張への流れが自然であるか」を到達基準として評価したところ、90.3%の生徒が到達基準に達する文章を書くことができた。

3 成果と今後の課題

生徒の「論理的に書く力」を育成するために、メタ認知を活用する授業は有効である。生徒たちは小さな段階を積み重ね、またそれを振り返ることにより、「目標に対して自分がどのように到達できるか」というメタ認知を獲得し、それを活用して論理的文章を書き上げることができた。また、「目標にどのようにすれば到達できるか」を理解しながら論理的文章を書き上げたという達成感が、生徒たちの「論理的に書くこと」への苦手意識の改善にもつながった。

今後、この授業展開を応用して、様々な構造の型を用いた「論理的文章を書く授業」を計画していきたい。高校3年間の「論理的文章を書く授業」として、「客観的な根拠を持ち、自分の意見を述べる」、「問題提起をとらえ、現状と対策を述べる」、「反対意見を考慮しながら自分の考えをさらに深める」といった、様々な構造の論理的文章を書く授業をデザインすることにより、生徒が必要に応じて構造の型を活用できるようにしていきたい。また、思考内容を構造化するためにも、生徒の知識と社会問題をどのように関連付けるかについても考えていく必要がある。